



『安息を大切に守る健康な家庭』

説教者: 鄭南哲牧師

(Rev. Jung nam-chul)

聖書本文: 出エジプト記20章8-11節・暗唱聖句: ヘブル人への手紙4章10節

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 一週間も神の平安を保って、心もお体もお元気でしたか。先週一週間はいかがでしたか。心も体も疲れを感じる方々はいらっしやらないでしょうか。実は、子どもたちは子供たちなりに、大人は大人なり、お年寄りの方も、なぜかみんなが忙しくて、慢性的な疲労や疲れを感じている時代の中で我らは生きています。しかし、一日中職場で汗を流しながら、働いて家に帰って来る時、家は我らの安息の源や巣のような場所となるでしょう。我らはいつとも疲れた体は休まれ、学校や職場でたまった緊張感やストレスなどで疲れた心の疲労も、家と家族の中に得られる安息によって我々は回復され、新しく力を得て、また翌日、学校や職場に向かえます。もし、家で適切な休みや安息を取れないなら、我々のすべての行動や心は混乱し、焦り、不安定になり、落ち着かずに、周りとの関係が崩れたり、自身が進むべき人生の方向を失ってしまうかも知れません。そういうわけで、我らにとって家庭、家族がいるホームというのは我々にとっても一番大切なところであるのに間違いありません。ところが、聖書では家庭や人によって得られる体と心の休みや安息だけではなく、神様から頂ける魂への安息の大切さも強調しています。どうすれば、我らが神の安息の中に入り、神の安息を頂き、経験できるでしょうか。

ヘブル人への手紙4章11節にも、「**ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣(なら)って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。**」とされています。

結論で言いますと、人は神様が定めて下さった安息日を守れと命じられたその安息日を守ることであると教えて下さっています。神様は我々に安息を守る信仰、そして家庭となるようにと命じられています。私たちが安息を守れば、安息が我々を守ってくれると約束されています。本日聖書箇所は、神様が荒野を通られていたイスラエルの民と家庭がさらに祝福され、守られる為に与えて下さった十戒の中で、安息に関する四番目の戒めの内容であります。本文8節には、「**安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。**」という御言葉を通してともに神の御心を知り、神の恵みを共に分かち合いたいと願います。

<①まず神の安息の日を正しく知り、守り行う(真の安息日(主日)は一番最後の日ではなく、一番初めの日)>

正しく安息日を守るためにはまず、安息日がいつであるか正しく知らなければなりません。

本来旧約の安息日は金曜日の日が沈む時から土曜日の日が昇る時まででした。

それは創世記1章に出ている「**夕があり、朝があった。**」という御言葉に従って安息日の始まりを夕方からとしたのです。

ユダヤ教とか、カルト異端の中でセブンスデー・アドベンチスト(Seventh-day Adventist, SDA: 日本では「安息日再臨派」と呼ばれ、(日本アドベント・キリスト教団)、系列は三育団体・学校など)では今も日曜日ではなく、毎土曜日に集まって集会を行っています。そしてイエスキリストを救い主として信じません。あるクリスチャンの方々の中では、安息日から主日(日曜日)にただ日にちだけ変わっただけだと考えている方もいます。このようにキリスト・イエスにあって**真の安息と安らぎを受けるために、まず、我々は真の安息日についての聖書的な正しい理解が必要です。**

厳密に言えば、聖書をよく観察してみると真の安息日は一週間の一番最後に守る日ではなく、一週間の一番最初に守るべき日であることがわかります。なぜですか。旧約聖書の創世記を読んで見れば、神様が六日間天地万物を創造される時、人間は一番最後の六日目に造られました。そして、その次の日七日目に休まれたと書かれているので、神様にとっては七日目に安息を取られたことがわかります。しかし、人にとって見れば、いかがでしょうか。人間が造られた次の日、つまり一番最初に向かえた日が安息の日になったのがわかります。これは、つまり**人間は働いてから、休んだのではなく、休んでから働いたことがわかります。**

人はひとまず、安息の休みから得られた力とエネルギーによって、六日間頑張って働ける存在として神によって造られた存在であることがわかります。

そういうわけで、カレンダーをよく見て見ると、日本のカレンダーは日曜日を一週間の最後においていますが、特に長い間すでにキリスト教の信仰や影響をもっている西洋のほとんどの多くの国のカレンダーには、休みの日曜日が一週間の一番初めにおいているのはこのような聖書的な信仰観から出て来たこと部分であることがわかります。

そして、安息日が週の最後土曜日から、初めの日(日曜日)変わったのは安息日の主人あるイエスキリストによってそのように変わったことが分かります。安息日の主人はイエス・キリストご自身であると聖書では記されています。

マタイの福音書12章6-8節で、「**6あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります。7『わたしが喜びとするのは真実の愛。いえにえではない』とはどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、咎のない者たちを不義に定めはしなかったでしょう。人の子は安息日の主です。**」

ここで、主日の意味と始まりは、イスラエルでの安息日の翌日、週の初めの日(マタイ28:1)、その日に十字架につけられ死なれたイエスキリストが死を打ち破り、よみがえられ救いの御業を完成されたのです。そのイエスキリストのよみがえられたその日から、イエスキリストを信じる信仰によって、どんな人々にもすべての罪が赦され、神の永遠の命が聖書の御言葉の約束通りに与えられるようになりました。

そのイエスキリストによって、人々は旧約の律法的な安息日ではなく、実際イエスキリストの復活の日、つまり、安息日の翌日である週の初めの日(今日の日曜日)にイエスキリストの御名を信じて、罪赦され、救われ神の恵みを受けた者たちは共に集まり礼拝を捧げながら、真の神の安息を頂いて来たのです！もはや旧約の安息日から、蘇られた日を安息日として変え、そう定められたのは安息日の主人であられるイエス・キリストによることであつたことが分かります！

新約時代に來られた救い主であるイエスキリストを通して信じ、罪赦され、救われたすべての者たち(クリスチャンたち)が真の安息日の主人であるイエスキリストが復活された毎週の初めのその日に、集まって主の御名を崇め賛美し、礼拝を捧げられたのが初代教会と主日礼拝の始まりとなりました！イエスキリストを信じる信仰によって、神様に礼拝を捧げるながら、神の罪赦しと救いを確かめ、聖霊に満たされ、神の真の平安とやすらぎを頂きながら、魂が潤され、回復され、新たに強められていくことを経験することになった真の安息の日が主日、つまり今日の日曜日に当たるのです。

なので、今日に至るまで我々は安息日の主人であられるイエスキリストによって、定められた週の初めの日、日曜日にすべてのキリストの教会は礼拝を行い、守って来ているわけです。ですから、みなさん、日曜日~~が~~ただ休みだから教会で礼拝が行われているわけでは決してなく、ちゃんとイエスキリストによって変わり、定められたことであることが分かります。

* 使徒の働き20章7節「**週の初めの日に**、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。」

* コリント人への手紙第一16章2節「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、**いつも週の初めの日に**、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。」

このように主の始めの日、主日(日曜日)に御言葉を聞き、聖餐が行われ、主の働きと教会のため献金を捧げたのです。

そして、使徒ヨハネの時代に生きていた初代教会の牧者イグナティウス(Ignatius)という方はこう語りました。

“キリストを愛する者たちは、だれでも週の初めの日、主の日を聖く守るべきである”

この主日(日曜日)に、主からの真の安息を頂くために捧げられる礼拝を1600年以上一番大切に信仰の生活の中の一つとして守られて来て、今日私たちまで渡されているわけなのです。

ですから、愛する信仰の家族のみなさん！毎週主の日の礼拝を大切にし、聖く守らなければなりません。

まず、主の日、主の教会の中で礼拝を捧げられる事を最優先に、しっかりと大事に守ることが神の御臨在の中で神の安息に入り、その安息を実際に頂ける祝福の道である事を忘れないで下さい。「22家を建てる者たちの捨てた石。それが要(かなえ)の石(イエスキリストの死からよみがえりの事)となった。23これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。24これは**主が設(もう)けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。**(詩篇118篇22-24節)」

こんにちの家庭はとつても忙しくて疲れているように見えます。そんなに深刻でもなく、大きい問題をもっているわけでもないのに、大事な関係が割れ続け、様々な葛藤、罪責感、無気力になったり、煩い続けている根本的な原因は実際、神様からの安息の命令に従わなかったため、すぐ敏感になり、よく感情的になり、ぶつかっている問題をなかなか克服できず、苦勞しているのではないか

と思います。その根本的な原因は正しく**休めなかったから**であります。我々を創造された神様はそんな私たちの限界と弱さをよくご存知だったため、むしろ、創造の秩序通り、私たちの命を守られ、祝福される家庭となるためにも、神様は信じる全ての者たちに、働く前にまず、安息日を覚え、守るようにと命令されたのです。

例)アメリカのまだ自動車も、車もなかった西部開拓時代に起こった実際の出来事です。一つの群れの馬車がアメリカ中部のセントルイスから西部オーレーガンまで約3300キロを渡る横断し、移動することでした。みんな信仰を持っていたクリスチャンたちだったので日曜日は礼拝し、安息しながら移動をしないで休みました。しかしすばやく冬が近づいて来ると、一部の人たちは大雪が降る前に目的地に着けないかも知れないという不安のため安息日にも休まず移動し続けることを提案し始めました。結局意見は合わず、二つのグループに分かれて働くことになりました。今まで通り日曜日に休むグループと日曜日も移動し続けたグループと分かれていましたが、どうなったと思いますか。言う余地もなく日曜日に安息し、休んだチームが結局オーレーガンにもっと早く着いたそうです。安息日に十分休んだ後に、得た活力によって人も、馬ももっと早く走り続けることができたのです。

マルバドンという方はこの実話を引用しながら結論的にこう言いました。**“神様はご自分の戒めを尊重する者たちを尊重される。”**

＜②神の安息を頂く為の前提:六日間神から与えられた仕事に忠実にする＞

私たちは十戒の四番目の戒めを覚える時、よく安息だけを強調する傾向がありますが、**本文9節は神の安息を頂く前に、神様が定めた重要な前提**があることを忘れてはいけません。それは、六日間、自分に任された働きを忠実にしなければならないと強調されていることです！すなわち、**月曜日から土曜日まで、自分に与えられている仕事や働き、責任、役割を忠実に働いた者こそがふさわしい安息を迎えられる**ということです。今日の本文の9節にも**「六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。」**と命じられています。

新約聖書で使徒パウロも**「働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。」**と命じました。(テサロニケ人への手紙第2章10節)キリスト教のこのような労働観はキリストの福音が伝えられている所なら、どこでも勤勉な労働文化の花を咲かせ、経済的な先進社会になるようにと寄与(きよ)して来たことが分かります。社会学に大きく貢献したドイツの社会学者であるマックス・ヴェーバーは彼の有名な著書**「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神(The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism)」**にこのような事実を述べています。経験なクリスチャンだった清教徒たちはあらゆる職業は、神様からの召命だと信じ、使命を持って一般の人々より忠実に働きました。お金も、お金の主人は自分ではなく神様ですから、働いたお金を無駄遣いしないで、節約し、貯金しながら価値のあるところに分け与えて来ました。ですから、クリスチャンが多い国では寄付の文化が作られ、労働や仕事をも大切にすることのような精神が、近代的資本主義を発展させる原動力(げんどうりょく)となったと指摘しました。**その話しの意味は、労働、仕事、働きは罰ではなく、神様からの与えられたものであり、働けることは感謝で、特権であることを教えてくれたのです。**むしろ、働くことを卑しく思ったり、働かないで楽に遊びながら、食べようとするのも問題であり、罪であることを忘れないでください。

ですから、仕事や労働は決して人の罪の結果ではありません！時々、聖書をざっと読む方々の中で、人間の労働について、墮落の結果もしくは罰の結果だと誤解している方がいます。しかし、覚えるべきなのは人間の墮落の以前にも、人間は働いていたという事実です。**創世記2章15節**をみると、**「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕(たがや)させ、また守らせた。」**墮落は楽しいことを、苦しいことに変えてしまったのです。ですから、働くのが苦しくなったら、それは墮落の影響であります。しかし、大切なことは、私たちがもはやキリストにあって新しくされた者であることです。私たちの救いは私たちの働く態度にも影響を与えるべきだと思います。神から与えられた感謝しつつ、働かなければなりません。

フランスの宗教改革者であるジャン・カルヴィン先生は**“我々に与えられている職業はどれも卑しいことなく、牧師の働きのみならず、我々がやっているすべての職業は神様から与えられた仕事だと信じて使命を持って最善を尽くすべきである。”**と言われました。これを**「職業召命論」**と言います。教会の牧師や伝道師などの教職者が神様から召しを受けて働くように、誰でも自分に与えられた仕事は神様の前では等しく大切であり、尊いという信仰の姿勢でした。

これによって以前のヨーロッパの労働者たちは何もしないで、人生を楽しんでいる金持ちの人生をうらやましがり、働かなければならない、決まっている自分たちの人生を悲観していた労働と仕事に対する考え方を変える大革命になり、この意識と生き方の転換

が、やがて18世紀半ばから19世紀にかけて起きたヨーロッパの産業革命が起こされ、社会を発展させる原動力になったことを歴史を通して我々は知ることが出来ます。ですから、神の安息を受け、安息日を守る健康な家庭を立てるのに、大切な前提はまず今自身に与えられているすべての仕事が神様からのものであると信じて、忠実に働く者こそ、受けることが可能になることを忘れないでください。

<③神の安息を頂く為に、一週間の仕事を中断する(神を信頼し、委ねる切る信仰)>

ところが、聖書の本文には七日目の日は「**どんな仕事もしてはならない**」と教えています。

10節を読んでみましょう。「**七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。**」

この箇所が一番大切なところは「**どんな仕事もしてはならない**」です。つまり**六日間やって来たすべてを止めるべきであること**です。ヘブル語で、**安息**と言う単語は「**シャバット**」ですが、これは**仕事を中断する、おろす**という意味です。神学者であるマルバドンという人は彼の名著[安息]という本で、「**仕事を休めるだけではなく、生産も、成就も、そして悩み、煩いも、そして、緊張も止めること**」だと言っています。所有しようとする努力も、そして神になろうとする努力も止めるべきだと語っています。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！**私たちが休むべき時、休めない原因はどこにあるでしょうか。**

それは休んでしまうと、仕事を終えないとかなり自分に損になるのではないかという不安の思い、自分が動かないと気が済まないので、**すべてを監督しないといけないような気がします**。分かりやすく言うと、**神様に完全にゆだねられない、任せられないから**です。それを裏付けると、罪のある人はまるで自分がしきりに神のようにやろうとする霊的な高慢と疑い、不従順しようとする心を持っているからであることが分かります。

出エジプト記20章11節の後半には「**それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。**」と言われました。

どんな意味ですか。**安息日は我々の幸福のために神様がご自身で備えられ定められた日**であることです。

神を絶対に信じ、安息日を守る人たちには、決して神様は損にさせない、むしろさらに強めさせ、全てを全う出来るように主が導き恵ませて下さるといふ約束されました。

例) 人類の歴史においても似たような事例があります。みなさんもよくご存知のロシアは旧ソ連の共産主義の国でした。

旧ソ連で共産党の革命が成功した後、共産党の指導者たちは労働者たちの生産量をもっと増やすために、キリスト教文化の産物である日曜日の休みをやぶるために、十日間働いて休む制度を決意しました。しかしその結果はむしろ経済をもっと悪くされるいっぽでした。病気になる人や事故などが急増するなど一年も続かず、結局六日間働いて、日曜日は休む日に戻ってしまいます。

愛するみなさん！ 日曜日に神に礼拝しつつ、休むのが、もちろん、しばらく職場上の関係で出来ない方もいるかも知れません。しかし、出来るかぎりを尽し、神が人をまず休み、神の安息を受けて、その後働くことに造られた存在であり、そうするのが仕事ももっと効率的に、長く続ける健康と力を得られることを忘れないようにしましょう。

心のどこかで、神様が定められた主の安息の日まで私たちは働かないとどこか不安な気持ちがあり、自分がやらなければならないような微妙な焦りをもっていませんか。**神様は休むべき時には、休めるようにと命じられます**。この世で一番かわいそうな人がいるなら、それは休まずたえず、死ぬほど働いて結局、倒れて死んでしまう人ではありませんか。仕事が健康より、家庭より、神様より優先になってしまい、大切な全てを失ってしまう残念な結果が今日はどれほど多いのか分かりません。**仕事が神様から与えられている使命であり、人生の幸福の為の一つの手段ですが、間違ったら、仕事が自分の人生全てを支配する、一つの偶像の神のようにならないように気を付けなければなりません**。仕事自体が人の生きる目的になってはならないということです。

神様が安息日を定めたのは、我々の人生と家庭の祝福と幸福のために、安息を守れと命じられたのを大切に覚えましょう。

<④神の安息は人のたましいに安息(霊的安息)と祝福を与える>

神様が下さる安息と言われると、一般的に肉体的な安息をまず思い出しますが、より大切なことは霊的な安息です。

霊的な休みがない安息は、まことではありません。実際、イエス様が来られた目的もまさに人々に真の霊的な安息を与えるため

した。あの有名なマタイの福音書11章28節にイエス様はこう言われています。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

我々の人生が休めない根本的な原因は罪からの重荷(罪意識、罪の葛藤、欲望、戦いなど)ですが、イエス様は我々の代わり、ご自分で我々の罪の重荷を負ってくださることにより、我々を自由にされ、救われたのです。

ですから、愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさん！ある意味で救いというのは、たましいの安息の別の名前だとも言えます。神の安息に入ると言う言葉は神の救いを味わい、経験するという表現でもあります。

本文の11節に「**主は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。**」と言われます。ここで**聖なるもの**という単語はヘブル語の“**カドシュー**”といて、“**区別して取っておく**”という意味です。信仰の先輩たちは一週間のうちに、この日を区別して神様を礼拝し、聖書を読み、祈りと交わり、そして、きよい読書(Lectio Divina)をしながら、霊的糧を供給していただく時間として過ごして来たのです。イスラエルの人たちは**安息日を意味する**もっと上品な単語として、**‘シャバット’**の代わりに**‘メヌハ(menuha)’**という単語を使います。「メヌハ」とは“**満たされる平安、美しい静けさ、健康な力**”を意味します。つまり、**日曜日、安息日が単純に何もしない日ではなく、神の霊的な安息と力を頂きながら、喜びと感謝があふれる日**であること覚えさせるためにこの単語を使って来たわけでありました。そういうわけで、イスラエルの人たちは安息日は神様からの**永遠のいのち**を頂ける**‘永遠のメヌハ’**だと言いました。

あの有名な詩篇23篇2節に「**主は私を緑の牧場にふさせ、いこいのみぎわに伴われます。**」の、「**いこいのみぎわ**」がまさに**メヌハ**なのです。

ですから、**ヘブル人への手紙4章10・16節**には神の安息を得るためにこう書かれています。

「神の安息に入った人は、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを休むのです。」16節「**ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。**」**我らのたましいの安息、メヌハの安息は安息の日、主の日礼拝の中特別に臨在される神様を通して得られる恵みでありませぬ！**イエスキリストを信じて救われた我々が、主の日に、主のご臨在の中で礼拝を通して、どこでも得られない、神様からの魂が霊の糧、霊的な恵みと力を供給され、きよめられ、強められる時に、たましいの豊かさ、平安、感謝、喜びが保たれます。このような目的のため一週間のはじめの日、主の日が区別され、神様に礼拝を捧げなければなりません。

クリスチャンは**何よりも神様の御言葉と礼拝を通して、また信仰の家族との交わりを通して、霊の安息に入り、神の愛と恵みを分かち合えるのです。**

<⑤主の日に神の安息を頂き、益々祝福され、幸いで健康な人生と家庭となるように！>

ユダヤ人たちは安息日が始まる夜になるといつも二つのろうそくをとめます。

一つは出エジプト記の安息を‘覚えなさい’の命令に対する従順を意味し、もう一つは申命記の安息日を“守りなさい”の命令に対する従順を表す意味です。二つのろうそくをとめた後、家族の代表が次のように祈ります。

“**宇宙の王である我々の神様、あなたの御言葉をもって我々をきよくしてくださるために、安息の火をともしなさいと命じられたあなたさまに感謝と賛美をおさげします。われわれの家を明かす安息日のこのろうそくの火が我々の家庭を照らし、平安と幸福となりますように。ああ、主よ。このきよい安息日に我々を祝福し、あなた様の栄光を我々に照らしてください。我々のくらやみのあるところに今照らし、我々と特にあなた様の子供たちをあなたの真理で、永遠の光で照らし、お導いてください。アーメン**”

このような祈り、賛美、礼拝、御言葉、つまり神様とのお交わりによって、霊の安息を頂きます。安息日に神の光が、神の平安と安らぎ、感謝と喜びが家族の中にあふれ、ともに神の新たな力を得ます。

週の初めの日、神の安息日に神の安息を頂きながら、神を礼拝し、神の家族と交わりながら、毎週を働き、生きる方々や家庭は必ず、益々祝福され、恵まれ、幸せになり、日々健康を保って生きて信じます！私は今日のこの神の御言葉の命令と約束を信じます！みなさんはいかがでしょう。これからも、わたしと我が家は、神様が我々と家庭をさらに、祝福し、幸福させ、健康を保たれるように、定めて下さったこのすばらしい安息の日を大切に守っていけるように切にお祈り申し上げます。神様からの十戒の4つ目の安息への戒めを我が家が最優先に、大切に守り行い続けることにより、毎週の霊肉、心身ともに神が下さる安息を頂き、神に慰められ、みなさんご自分とご家族がますます回復され、力づけられ、神様から与えられたまた明日からの使命を果たし続けられる祝福された元気な全クリスチャンプレイズチャーチの神の家族となりますようにお祈り申し上げます。アーメン！